ターだより No.3

福祉の中心地「北部シルバーエリア」見学記

リポーター 近藤吉典さん（東台1区）

近藤リポーター

誰も老いに逆らうことはできない。足腰が弱くなる。目や耳が遠くなり、体が思うように動かなくなる。私は読み書きに老眼鏡が手離せなくなった。老いは確実にやってくる。過日「秋田県北部老人福祉総合エリア」（愛称 北部シルバーエリア）を見学する機会に恵まれた。

（一）北部シルバーエリア

ここは老人福祉センターとして、老人介護・在宅福祉・多世代交流・生きがい活動など、老人福祉全般にわたり、多目的に活用できる総合施設で県内の三地域に設置されているとのこと。

北部シルバーエリアは、大館・鹿角・小坂・比内・田代の二市三町をその領域としている。

県主体のコミュニティセンター、温室、屋内外の運動施設とふれあい農園、市主体の特別養護老人ホーム、デイサービス・在宅介護支援センター、ケアハウス、ふれあいセンターなどが広さ二十三ヘクタールの敷地に配置され、付属公園とあずま屋が点在し、散歩コースになっている。これらの建物は廊下で結ばれ、自由に行き来できるが、慣れない人では迷子になるほど広い。

（二）特別養護老人ホーム「つくし苑」

常に介護が必要で、自宅介護が困難な六十五歳以上のかたが定員いっぱいの百人入所している。

ここでは、消臭用にオゾン発生装置、痴ほう老人対象施設として赤外線監視などの最新機器を備えているが、地域の人々の協力も欠かせない要素となっているという。

長谷川施設長（右）に取材中の近藤リポーター夫妻

広い廊下は天窓採光でやわらかい光に満ちており、社交場としての役割を果たしている。

一方、デイサービス・介護支援センターを併設し、利用者は一日平均十五人、最大三十人まで利用可能であり、ショートステイもできる。ここでは二十四時間体制をとり、病人が出たときは宿直者が当番看護婦に連絡し対処する。

（三）ケアハウス「ほうおう」

身の回りのことは自分でできるが、身体機能の低下で生活に不安のある六十歳以上のかたが対象。食事・入浴・緊急時の対応はもちろん、入居者の相談にも応じていて、いわば安心付きのアパートに入っているという感じである。外出、外泊も自由にできるとのことである。

各室は花の模様のタイルで標示され、無段差で手すりつきの廊下は車いすや歩行者への配慮がうかがわれ、心のなごむものがある。

費用は、家賃と生活費、事務費などで、一カ月一人当たり最低七万～八万円。所得により違っている。

入居者の趣味と生きがいのため、陶芸、木工、文芸などさまざまな空間が用意され、交流の場となっている。ただ、いずれの活動にも参加しない人ほど痴ほうになりやすいという一言に考えさせられた。

（四）おわりに

福祉エリアの職員は、全体で九十人（県十五人、市七十五人）で、国の職員定数の基準を上回っているとのことである。

職員には若い人が多く、猛暑の中、汗だくになって仕事をする姿に大変さを感じさせられた。彼らの応対はさわやかであり、暑さを忘れさせるものがあった。また、入居者や職員のあいさつの良さにも驚かされ、施設長や先輩職員の指導の良さを感じた。

木の香漂う落ち着いた建物をあとに、炎暑の中「老い」について考えつつ帰路についた。

豊かな自然に囲まれた北部シルバーエリア